
紙とペンでつくる魔法

荒嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙とペンでつくる魔法

【Nコード】

N6270Q

【作者名】

荒嵐

【あらすじ】

魔法の存在が確認されてから200年、また新たな学生が魔法使いへの一步を踏み出そうとしていた。

小説閲覧設定で改行倍率を2倍にしたほうが読みやすいかもしれません。

一章 入学とテストと初期成績 プロローグ（前書き）

初めての投稿で皆さんの目にかなうかわかりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

一章 入学とテストと初期成績 プロローグ

4月3日。この日は多くの学生にとって新しい出会いの日になっている。多少日にちが違うこともあるが、少なくともこの学校

国立第七魔法高等学校は今日4月3日が入学式だ。

良く言えば新たな日常の始まり。悪く言えば新たな困難の始まり。そんな状況のせいかな、希望と緊張で複雑な顔をしている生徒たちが続々と教室に入っていく。

自然の崩壊 Nature ナチュルエクスプロージョン
explorationが起き、人は科学とは別の力を手に入れた。

魔法。

それまでは空想上のもの。

あくまでかつて人が見た夢物語のうちの一つだったもの。それが現実に存在するものになった。

当時の人々は手品の一種だ、そんなものがあるはずがないと、口々に言った。しかし彼らもやがて、否応なしに魔法を信じざるおえなくなった。

そして、最初の魔法が観測されてから200年。魔法の存在とその必要性が認められ、世界各地に魔法学校が設立されていた。

そして今日この日、新たな魔法使いの卵たちが入学するわけなのだが……………残念なことに、まだ来てない新入生が、二人いた。

一章 第一話（前書き）

短めですが、その内長めに書けるようになってみたいです…（願望）

一章 第一話

「はぁ、はぁ」

一人の少年が薄暗いトンネルの中を駆けていた。

少年の前に拳より二回りほど大きい光球が浮かんでおり、前方を照らしている。呼吸は疲労で乱れていたりせず、一定のリズムを刻んでいる。

（しまったな、まさかこんな時に寝坊なんて典型的なことを…）

かすかな後悔がむくむくとよみがえってきたが、首を振り頭の隅に追いやった。

（悔いてもしかたがない。とりあえず速く走ること意識を集中…）
頭の切り替えが早いのだろう。少年はさらに足に力を込め、スピードを上げ、先を急いだ。

軽快に地下道を疾走していると、前方に明かりが見えてきた。しかし、出口からの光という訳ではない。少年が地下道に入ってから時間を考えると、出口まではまだ距離があるはずだ。

明かりの正体は光球のようだった。

この地下道を通るとき、必ず自前の明かりが必要となる。定期的に地下道の道を変動させており、電灯などの明かりを設置できないからだ。

2000年前であれば懐中電灯を明かりとして使うところだが、魔法が存在するようになった現在では、初歩的な魔法である ライトボール 光球を明かりとして使用している。

（…誰かあそこにいるのか？

学生はもう学校で入学式の準備をしているはずなんだが……） 因

みに少年は、自分のことを棚にあげていることには、気づいていない。目の前の光について考えながらも全くスピードは落とさなかったため、すぐにそれに追いついた。

光球に照らされたそれを見た少年は息を飲んだ。

それを一言で言うなら白。

光球よりもまばゆい光を放つ純白。

そこに、とてつもなく綺麗な白の少女が倒れていた。

否、埋もれていた……

一章 第二話

国立第七魔法高等学校　通称七高は全寮制だ。因みに他の魔法学校も、七高と同じように全寮制だ。

なので、入学初日の新入生の荷物は非常に多い。人によっては、山のようにと言う比喻が比喻でなくなるほどだ。

そして、少女は山のような荷物に埋もれていた。
もちろん比喻ではなく。

顔と足が荷物から覗いている。転んだせいか、スカートがめくれかかっているとても危険な状態だ。

「…うわ、パンツ見えそうになってるし…」

「きゃー！！だ、誰！？見ないでよっ！！」

「うわっ！！」

少女は起きていたようで少年の声に悲鳴をあげた。

「見ないでよ変態！！」

「み、見てない！！」　実際、少年は見えていない。だが、スカートは見る位置によっては中が見えてしまうような本当にギリギリの位置だ。

「……本当に？」

「ほ、本当だ」

しばらくうろついていたが、とりあえず自分の中で無理やり納得させたのかおとなしくなった。

「……まあいいわ、なんでもいいからとっと行きなさいよ」「はあ」

少年が少女の顔の方に回り込んだ。

（…近くで見るとますます白いな）

肌は転んで着いた土が気にならないようなシミ一つない白さで、髪は老人の白髪とは質が違い、艶がある独特の輝きを放っていて、その中でエメラルドグリーンの瞳が宝石のように光っていた。

（綺麗だ）

少年は純粹にそう思った。「……て言うか、こんなところで何やってんだ？」

「な、なんでもないわよ……」

「……もしかして荷物が重すぎて動けなくなってるのか？」
少女がビクツとする。

「……」
「……」

「……」
「……」

「……」
「……」
「……」
「……」

途端に少女の顔が真っ赤に染まる。

「し、しょうがないじゃない！荷物は重いし、女の子だから力もないし！」

眉をつりあげ少年を睨む。

（……怒った顔まで可愛いとは……）
少女の怒り様とは裏腹に、ずいぶんとマイペースなことを考えていた。

「で？」

「……何よ？」

「そこから一人でどうにかできるのか？」

「……………」
「……できないなら手伝お」
「で、できるわよっ！すぐにどうにかできるんだから！」
「……はあ」
（ならなんですつとその状態なんだろうか…）

「ん〜っ」
上体を起こして起き上がろうとするが、起き上がれない。
「ん〜っ！」
魔法を使おうとするが、手が荷物に埋もれてて使えない。
「ん〜っ！〜っ！〜っ！」
足をじたばたするが抜け出せない。

ヒラヒラ。

「……パンツ見えるぞ」
「っっ！ばかああ！！」

（……………涙目なってきたし、そろそろ助けるか）
少年は少女の首根っこの辺りを掴んでグッと引っ張りあげた。
「……………グスッ」
「ほら、しっかり立てって」
「……………変態」
「はいはい」（……………自分が意地を張っていたからだろ。まあ口には出さないが……………さて、人助けもしたし、行くか）
「お前も……………」
急げよと言いたかったのだが口にできなかった。

少年は旅行バック二つ分ほどの荷物だったのだが、少女のはその三倍ぐらいあった。

「……はあ」

ため息一つつくと、少年は少女の荷物を全て（・・）担いだ。

「ちょ、ちよつと！ 何してんのよ！」

「どうせこれ持ってけないだろ。だから、俺が持ってってやるよ」

「い、いいわよっ！ それぐらい自分でやるわ！」

、暴れたり叫んだり泣いたりしたせいか、頬がすこし赤い。

「……………さっきの二の舞になるぞ？」

「うつ……」

正にその通りなので何も言い返せない。

「まあ気にすんなよ！」

チラツと腕の時計を見る。

（…………マジで遅刻かもな）

「じゃ、先行くな！」

肩の荷物の感覚を確かめた後、少年は走り出そうとしたが、何かを思い出したのかポケットから何か出した。

「そうだ、ほら」

「え？ わっわ！」

少年が投げたそれを少女が慌ててキャッチした。

「そこに俺のクラスが書いてあるから、後で取りに来てくれ」「え、待っ」

「もう時間ないからな、お前もか急げよ。じゃあな！」

少女が何か言う前に少年は走り去ってしまった。

「……早すぎでしょう、あれだけの荷物を背負っておいて……」 手ぶらなことに何となくそわそわしながら悪態をつく。

パラパラと少年が投げていった生徒手帳開くと、そこにクラスと名前があった。

「…1年G組、からすき烏木…こじつ荒夜…」

「…私と同じクラスなんだ…」少女は深くため息をついた。

「……私も急がないと…」

思い出したように、少女も七高に向かって走り始めた。

白い髪が暗闇で揺れた。

一章 第三話（前書き）

まだ内容は短めですが、少しずつ伸ばしていきたいと思っています。

一章 第三話

地下道を抜け、門を抜けてからの景色は圧巻だったと言わざるを得ないだろう。

それぞれ必要物資の補給・魔法の研究・都市及び学校の防衛の役割を持つ、天を衝くようにそびえ立つ3つの高層ビル。巨大な半球状の多目的用スタジアム。「学校」という範疇では収まらない規模の数多くの近代的な建造物。ここにある施設は全て学生のための設備であり、学生と彼らをサポートする人たちのため 新たな魔法使いを育むための環境だ。

（スゲーな。実際に見てみると）

少年 荒夜はパンフレットの写真を思いだし、実際に見る街のスケールの違いに圧倒される。

しかし、時間がないのは本人が一番分かっているので、立ち並ぶ建物を横目に、最も深い位置にある建物へと、真っ直ぐ向かう。そこには七高の校舎 魔法使いの学校があった。近代的なデザインで、外観の真新しさから、まだ歴史が浅いことが感じられる。

荒夜は勢いもそのまま、校内へ突っ込んでいった。

教室の前で一旦立ち止まり、息を整える。ここまでかなり速さで走ってきたのにもかかわらず、荒夜の息は切れておらず、一呼吸で息は整った。

教室のドアを開け、中に一步踏み出す。無駄に性能が良いのか、それともただの偶然なのか、ドアを開けるときの音は一切しなかった。教室の全員の視線が荒夜の方へ一挙に集中する。教壇の前で何か話をしている、見た目三十代の教師の横から、学校初日は大荷物になることを差し引いたとしても、多すぎる荷物を抱えた少年が入ってきて、皆、若干の興味を抱いていた。

「…式は始まつたらんからまだ良いが、初日から遅刻は感心せんな」
少しばかり強面の教師から叱責が飛ぶ。

「すいません…」

形だけの謝罪を済ませ、教室を見回し、自分の席を探す。

「…あの、俺の席はどこですか？」

空席はあった。普通はそこに座れば良いだろう。

しかし、荒夜は席につけない。空席は1つではなく 3つあったからだ。

（まさか、他に遅刻した奴が俺以外に2人もいるのか？地下道であったあの娘が同じクラスだとしてもあと一人……………あ、そういえばあの娘に名前聞くの忘れてたな）

「あー、ほら、お前の席はそこだ」

「あ、はい、ありがとうございます」

中身のない感謝の言葉を告げ席に着く。疑問もあったが、とりあえず後回しにすることにした。

荒夜の席は、窓際のなかなか良い位置にあった。背負ってきた大量の荷物は、教室の後ろに置いてある。（普通は先に寮に行き、荷物を置いてくる）

「これから15分後に入学式が始まるから、各自準備しとけ。因みに、その後には教室で、各自自己紹介とかするから、内容考えとけよ」

ぶっきらぼうにそれだけ言うと、スタスタと教室から出ていってしまった。それと同時に教室が喧騒に包まれる。皆、この短い間にクラスメートと交流を深めるつもりらしい。

そんな中、1人、荒夜のもとへ駆け寄ってくる姿があった。

「よお！何遅刻してきてんだよっ！」

「おつす、カズ」

古金和輝。こがねかずき 荒夜とは幼い頃からの付き合いで、互いを親友もしくは悪友、腐れ縁の様なものだと思っている。

「で、やっぱ寝坊か？朝は駄目だもんな、荒夜は」

「……さすが、付き合いが長いだけ分かってるな……」

長い付き合いなので、お互いのことはよく分かっているらしい。

「そう言えば、俺が来たとき空席が3つあったよな？他に遅刻した人がいるのか？」

「ああ、1人はお前と同じ遅刻だったよ」

「……もう1人は？」

「……それが、もう一人は今年の総代らしいぜ」

耳に顔を寄せて小声で話してきた。恐らく、特に意味はない。

「本当か？」

「マジだマジ。マジと書いて本気だ」

「……どうでも良いけど、逆じゃないのか？」

「いいだろ、本気と書いてマジなら逆でもあってるだろ」

「……まあ、どっちでもいいか」 長い付き合いなので、ギャグのセンスが和輝にないことは分かりきっているので、大して気にしない。

「てかお前、随分大荷物だったよな。一体、何入ってたんだよ？」

「さあ？俺のじゃないしな、あれ」

「……は？お前のじゃないって……」

「いや、途中で女の子に会って たぶんこのクラスの遅刻した奴だと思うけど、荷物が重くて動けなくなってたから、代わりに持ってきたんだ」

「へえ……因みに、本人の了解は？」

荒夜が目を泳がせて口ごもる。

「……いや、俺も急いでたし……話してる時間もなかったし……少女と（少女で）遊んだことは口にしない。」

「……はあ。まあ、後で謝っとけば良いんじゃないか？」

「そうか？んー……そうか、そうだな。ん、後で謝っとくわ」
納得がいったのか、何度もうなづく。

「……でも、その場で『見捨てる』って選択肢はなかったのか？」

「……んー、まあ」

「……やっぱりお人好しだなー、お前は」

和輝は苦笑する。やはり、付き合い長さから、荒夜の性格は把握していた。

「そうか？大したことはしてないつもりだが」

「まあ、お前は気にしなくて良しさ。さて、そろそろ時間だ。行くぜ」

「ああ、そうだな」

2人は席を立ち、会場へと足を向けた。

荒夜は足を止め、教室を振り返る。

（……そう言えば、まだ来てなかったよな）

「どうした？」

「……いや、なんでもない」

和輝に声をかけられ、再び歩みを進める。

教室の空席は、待ちくたびれた様に、沈んでいた。

一章 第四話

入学式は時間までに席につけばいいというような自由な形式で、言い方を変えれば随分と大雑把な形式で行われた。

2人は式の開始数分前に入ったが、会場には既にほとんどの新入生が集まっていたため、2人は後方の席に着くことになった。

最後の生徒が入ったところで丁度時間になったらしく、開式の挨拶を生徒会らしき人が行い、式が始まった。

結果から言うと、この入学式で会場の注目を集めた場面が2つあった。

まず1回目は総代の挨拶に訪れた。壇上に彼女が現れたとき、会場の空気が変わった。

さらさらとした黒髪は適当に伸ばしてあるだけだが、小柄で顔が整っているため、普通なら可愛らしい印象を受けるだろう。しかし、その整った容姿よりも先に目がいく箇所があった。

腕。制服のそれがあるはずの部分は、風になびく草木のようにヒラヒラと宙に舞っていた。彼女には両肩から先にあるはずのものが存在しなかったのだ。

「今年度の総代を勤めさせていただく切傘きりがさふ浮由です」
(切傘……あの切傘か?)

荒夜は少女の名前からある一族の名前を記憶のそこから引き上げた。

切傘家。優秀な魔法使いを多く輩出し、魔法の名門として名を知らしめていた。魔法の素質は遺伝する。原因は解明されていなかったが、それが魔法の常識である。魔法が生まれたと同時に一族のものは魔法使いの素質を世間に知らしめ、直ぐ様魔法の名家として君臨するようになった。

しかし、1年前の前のある事件で一族の全員が命を落とし、世間から姿を消した。

ただ一人の少女を除いて。

その少女も無傷では済まず、生き残る代償として、両腕を失い、戦いから身を引いた。そして、切傘の名前は姿を消していった。

総代として壇上で話す切傘の少女　浮由の声は、かつて最前線で戦っていた戦士のものとは思えないか細い声で、話は終始抑揚のない淡白なものだった。その儚げな姿に心奪われる新入生が多かったが、彼女の金色の瞳に、射るような力強さが宿っていることには気づいてはいなかった。

2つ目は生徒会長が歓迎の挨拶をしたときだった。深海の様な藍色の髪。瞳は快晴の空のような光を放っていた。会場は静まったままだったが、アイドルを目にしたかのような高揚感で溢れていた。

「新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。今期生徒会長の夢籠千紘です」
ゆめこちずる

微笑みながら話す彼女に、場のほとんどの人が魅了されていた。男女問わずその姿に視線を奪われ、心を盗まれ、思考を破壊されていた。

新入生への激励を済ませ、満足げに笑うと、一礼して壇上から姿を消した。会長には非公式のファンクラブがあるのだが、この式が終わってからすぐに会員が激増したらしかった。

式が終わると、新入生の騒がしい声で廊下を満たされていった。おそらく、ほとんどは総代と生徒会長の2人が話題に挙がっているのだろう。

荒夜と和輝もその二人について話していたが、他の人の様に浮わつた話ばかりではなかった。

「…荒夜はどう思う？」

ウズきを堪えたような表情で荒夜の問う。赤の他人なら2人の容姿についてだと思っただろうが、荒夜は長年の付き合いから和輝の言いたいことは理解していた。

「2人の実力か？……切傘の子の方は分からないが、会長の方はかなりの実力だろうな。伊達に生徒会長は名乗ってないだろう」
顎に手を当て、自分の考察を述べた。

七高の生徒会長は生徒たちからの支持だけでなれるものではない。半数以上の教師たちからも支持を得なければならないのだ。そのため成績は上の上、多く集まる才媛たちのトップに立たなければならぬ。つまり今期生徒会長は、類い稀なる容姿を持ち、成績優秀な秀才であり、多くの生徒から支持を得られるような人格者である、完璧超人なのである。

「イイね。楽しみが増えてきたっ」

「…切傘って子は、同じクラスだからやりあう機会はそれなりにあるけど、会長の方は滅多に無いだろうな。仮にあつたとしても、おそらく勝てないだろうし」「そんなの、やってみなきゃ分かんねえだろ！」

子供のようにはしゃぎ、楽しそうに笑いながら宣言する。

「まあ、女性が相手なんだから、傷をつけるようなことはするなよ」

「ああー、難しいこと言うなよなー」

「男で強い奴を探したらどうだ？」

「そうだな。まあ、試験で大体わかるか」

「明日からだったよな？」

「ああ。…明日はダルい筆記かあ」

「まあ頑張れよ」

「お前はいいよな、頭いいから」

「お前も悪くはないだろ」

「荒夜よりも下だけだな」

「そんなに嫌なら、明後日の実技の事でも考えとけばいいだろ」

「んー、まあそうだな！」

良く言えばポジティブシンキング、悪く言えば単純で少し馬鹿っぽい和輝は満面の笑みを、荒夜はいつもと変わらぬ友人に苦笑いを浮かべながら教室へ戻っていった。

一章 第五話

教室に戻ると多くの人が雑談に興じていた。まだ会って間もないクラスメイトと会話している様子から、お互いに打ち解けるのにその時間が掛からないであろうことを予感させる。

教師が浮由を連れて教室に入ると、全員が会話を切り上げ席に着いた。

「あー、じゃあこれから名簿番号の頭の方から自己紹介をしてつてくれ」

やる気を感じられない声でホームルームが始まる。

(…この人はいつもこんな感じなのか？会って間もないに、それが「らしい」と思うが、なんか釈然としないな…)

そんな教師の姿に荒夜は拍子抜けというか、妙に納得してしまっている自分に複雑な気持ちにさせられていた。

名簿の頭の人から肩に力が入ったありがちな挨拶をし始めているが、荒夜は軽く聞き流しながら別の所に意識を向けていた。

(…まだ来てないのか。持ってきた荷物を渡さなきゃならないと言うのに…)

空席を見て小さく溜め息をつく。荒夜自身が学校に着いてからかなりの時間が経っていた。この時間が終われば今日の日程を全て消化した事になる。つまり今彼女が来なければ荷物を渡す為に教室で待つ羽目になるのだった。

ふと、自分の番に回ってきていたことに気がついた。「烏木」の頭文字は「か」なので早いのは当然のことだ。一瞬内容について考えたが、シンプルで無難に過ごすことにした。

「烏木荒夜です。趣味は特にこれと言ったものはありません。これから宜しく願います」

適当に笑みを浮かべ適当に挨拶を済ませ、また直ぐに座ろうとする。

シンプルと言うよりも必要なものがいくつか欠けている挨拶だった。
が、ここで教師の制止が入った。

「あー、ちよつと待て。これからの為に一応^{パーソナルカラー}能力色も言えつて言つたろ。初日から遅刻といい、ぼんやりし過ぎじゃないのか？」

一瞬、荒夜の動きが止まる。考え事をしていた為教師の言葉を聞き逃していた。

「……………」

一瞬迷ったが、いずれ分かってしまう事を隠していても無駄だと思
い、素直に打ち明けることにした。

「俺の能力色は、“黒”です。」

「…黒？」

なるべくあつさり言つたつもりだったが、周囲の視線は興味の色を
示し始めている。一番前の席で他の人の自己紹介に素知らぬ顔をし
ていた浮由も興味を示し、荒夜に視線を向けた。

黒と言う能力色は特別珍しいものではない。むしろ世間でありふ
れた能力色だ。しかし、それはもっと幼い子供の時期においてであ
る。

生まれたときは皆等しく黒の能力色を持っている。それが年を重
ねるうちに、一部の例外を除き“赤”“青”“緑”“黄”に変化し
ていく。“赤”は主に火を司っており、全てを燃やし尽くす破壊力
を持つ。“青”は主に水を司っており、あらゆる傷を癒す治癒魔法
を持つ。“緑”は主に風を司っており、全てを置き去りにする圧倒
的な速さを持つ。“黄”は主に地を司っており、大地のエネルギー
を自身の力に変える強化魔法を持つ。時間に差はあれど、小学校高
学年に上がる頃には皆既に自分の色を持っている。しかし、依然と
して荒夜の能力色は“黒”のままであった。今の所症例は荒夜1人
で、原因は分かっていない。たった1人の欠陥品^{おちこぼれ}の為に特別に研究
が行われる訳も無く、その為未だ解決法は見付かっていない。

「まだ色のない落ちこぼれですが、宜しく願います」

その一言だけ言い席に着く。気になった様子の人も居たが、次の人の自己紹介が始まったため荒夜への興味はその人に移っていった。注目の天才少女が席を立ったのだ。

「…切傘浮由。能力色は“アクアマリン藍緑”。よろしく…」

浮由は、荒夜とは真逆の意味でありえない色を口にした。

一般的には能力色は“赤”“青”“緑”“黄”のいずれかになるが、例外が2つある。その1つが2つの色を併せ持つ「エレクト神色」だ。そして、浮由の青と緑を併せ持った神色が“アクアマリン藍緑”である。

青と緑の神色の藍緑だが、唯単に2種類の魔法を扱えると言うことではない。青と緑の性質を複合し、新たな系統の魔法を使えるのだ。つまり神色の人物は、一般人よりもより多彩かつ強力な魔法が使えるのだった。このような例外は世界にも少数しか居らず、いずれの魔法使いも一流の魔法使いである。そして浮由も、その神に選ばれし者の1人だった。

「おい、いつまで固まってるんだ。次の奴早くしろ」

しかめっ面の教師が次の人へ促す事で、止まった時間が再び動き始める。荒夜よりも淡泊ではあったがかなりインパクトのある内容だった浮由の自己紹介も、教師にとっては面倒なことの1つでしかなかった様だ。

この時には浮由の与えた衝撃によって荒夜の事は忘れ去られていた。…その衝撃を与えた本人を除いては。

ようやく自己紹介が終盤に差し掛かり、もうすぐ終わろうとしている。そして今、最後の人が自己紹介を終えた。

「じゃあ、今日はここまでだからお前ら」

さっさと帰れ、と教師が言おうとしたとき

パンツ！！

扉が勢いよく開いた。それは荒夜には見覚えのある顔で、汗で髪を貼り付かせ上気して赤く染まった顔は何とも艶かしかった。

「はあゝやつと御到着か！説教の1つもしたいところだかまあ良い。ほら、自己紹介。お前で最後だ」

「はあ…はあ、え、えっ」

いきなりの事に反応できないのか狼狽え、混乱している。

「いいから、名前と能力色を言え」

「は、はいっ！」

苛立ち気味の教師の声で、少女は大きく深呼吸をし、口を開いた。

「みつくりふ光綺璃風です！の、能力色は……………」

ここで再びの沈黙。

「…………どうした、時間がないんだ。早くしろよ」

先ほどよりも苛立ちが増した教師の声に促される。妙に言い澀む璃風だったが、しばらく言い澀んだ後、ようやく口を開いた。

「の、能力色は…“白”ですっ！」

璃風が震える声で叫ぶ色は、正に彼女自身を言い表す色だった。

何度も述べたように能力色には“赤”“青”“緑”“黄”の4色以外の例外的な色がある。1つは浮由のような2つの色を兼ね備える「エレクト神色」。そしてもう1つが近年新たに発見された“白” 光を司る能力色だ。

未解明の能力色として注目を浴びた“白”。現在“白”の能力色を持つ者は1人、つまり璃風だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270q/>

紙とペンでつくる魔法

2011年5月15日09時25分発行